

有誠に向上底也手わざの所作は、さのみ六ツ敷事にもあらず、手前の大概を云へば、松陰杯景氣を見立、釜を釣やう取毛氈杯見合敷て、主客の座を設て、折敷に茶箱柄杓置合置也、客著座後、榻子か提物の類にて菓子を出す此茶請は、時に應じ色々了簡有へし、茶に取掛以前、主茶構への所へ向ひ、松葉木の葉杯釜の右の方にかきたて有を、火箸にて釜の下にさしくへ、扇を以てさつくとあふぎ立れば、釜一聲を發つす、扱釣をはずし、釜を水桶の際へ持行、左の手にてつるをとらへながら、右の手にて捲柄杓にて水を汲て、釜の蓋の上よりさつと流し改む、縁取の上に紛巾を出し置て底の露を取直に持出てもとのごとく釜を掛扱折敷にある茶箱を取て前に置引出し、折敷を我右の方にかりに置、茶箱袋の結目をとき、蓋を明てあをのけて、小手桶の前に置、其上に茶入をあげ、茶杓共同前に置、扱茶盃茶釜茶巾を折敷の上に置、茶箱の内にある薄茶入を箱の真中に置、袋の長緒箱の内へ押入、勝手の方へなをし、折敷なりとも持て、火桶の際へ行、茶盃茶釜茶巾柄杓皆々す、ぎ改め、折敷にのせ、爐がまへの所へ持出、前に置て折敷の上にてさばく手前也、茶立る茶釜を茶盃に付ながら左手に持、右の手に扇を開きおほひて、客前に持行渡す時、扇をのけて少々ふり點て客へ渡す也、此已下は仕廻別義なし、向爐がまへ、臺目がまへ杯、いくやうにもする也、夏冬の了簡も有べき事也、大悟の茶人、其時に應ずる作用、差排筆舌に及がたし、

〔茶之湯六宗匠傳記〕三、古田織部正殿自筆の寫

一へぎの案の事、野がけナドニテ、貴人へ御茶上ゲ申時、自然有事也、茶入へぎにのせかざる事也、茶の時はへぎをはづし、翻の少先脇ニ角チガヘテ置事也、茶入唐物の茶入ならば、唐物あいしらいにする也、

〔鹽尻九十八〕或茶人に唐物の茶の湯を望ける程に、其器物みな唐土の物を盡して珍らしかりしが、掛物計り何がしの卿の書給ひし、あまの原ふりさけ見ればの和歌也、客心得侍らざる事哉と